

J. コンラッドの『ナーシサス号の黒人』

に於ける三つの世界

東 城 真 造

序

ポーランド生まれの作家ジョウゼフ・コンラッド（1857～1924）は、20数年間の船乗り生活を送った後、1897年に自分自身の海での経験に基づいた『ナーシサス号の黒人』という小説を発表した。彼はこの時の決意を「芸術家としての極度の真摯をもって書いたので、起つも倒るるも、これ（この作品）によってなら更に異存はない⁽¹⁾」と述べている。そして彼が、外国語である英語をマスターし、あくまでイギリス人作家として、英文学史上にその名をとどめるに至る最初のチャンスをつかんだのは、この作品によってである。

この小説がまた別な意味で、彼の作品中でも非常に重要である理由の一つに、コンラッドの芸術家として、あるいは小説家としての目的や創作態度を示している著名な‘Preface’を持っていることである。その中で彼は芸術を次のように定義することから始めている。

（芸術は）万象のうちにひそむ多様にして唯一の真実の姿を把握し、眼に映る宇宙を最高度に正しく描き出そうとする誠実な試みである。万象の形や色や光や影、自然の風景や人生の事実の中に、根本的なもの、永久的な本質的なもの……それぞれの存在の真実を、見つけ出そうとする試みである。（それ故）芸術家は……真実を探求し、それを表現するものである。（P.vii）

芸術をこのように定義するコンラッドが、彼の作品を通して何を追求し、どのように訴えているかということ、つまり彼にとって真実が何であるかを考える時、我々は彼が人生を眺めようとする方法——『ナーシサス号の黒人』に於ては道德観、特に人間の連帯感——を感じるのである。何故なら、彼のこの道德観念は、もちろん彼の家庭生活、教育、海や陸での経験、更には彼が生きた時代の影響などによるものであるが、彼は直接に——

（私は）歓喜や驚異を感じる人間の力、人間生活をめぐる神秘の感性、あわれみや美や苦しみの感性、生きとし生けるものはみな同胞とする潜在的な感覚に、そして幾多の孤独な心を結びつけ合っている微妙な、しかも不滅の連帯感に、さまざまな夢、喜び、悲しみ、念願、幻想、希望、恐怖のなかで、人間たちをたがいに結びつけ合っている連帯感、全人類を結合し——死者と生者、生者と未生者を結合している連帯感に話しかける（P.viii）

と述べている。更にコンラッドは、あらゆる芸術は「彫刻の柔軟性、絵画の色彩感、音楽の魔術的な暗示性——これらこそ真の芸術である——を懸命に追求しなければならない」（P.ix）

と言っている。それ故に更に続けて “My task …… is by the power of the written word to make you hear, to make you feel— it is, before all, to make you see.” (P.x) と断言している。

この作品に於て、コンラッドは、ナーシサス号を道徳的な microcosm として描いている。そしてその乗組員に二つの試練——嵐と神秘的な黒人——を投げかけることによって、人間関係とその反応を我々読者に見せてくれるのである。彼は危機に直面した船上の問題としてばかりではなく、どんな社会に於ても必要な人間の連帯感の重要性を、心ひそかに主張しているのである。つまりコンラッドはこの本が、海洋小説であるばかりではなく、極限状況における人間性の心理学的研究であると主張している⁽²⁾。

一般にコンラッドの作品に共通するものは、「外界から断絶された世界、いわば試験管の中の世界」⁽³⁾に住む人物に、ある試練を与え、それに対する反応を描いてゆく点である。この『ナーシサス号の黒人』もその例外ではない。そこで私は、コンラッドが深く追求した、この人間の連帯感の問題がつまっている〈試験管〉を、三つの角度から、つまり〈三つの世界〉として眺めてみたいと思う。

第 I 章 海 と 陸

文学作品をより深く理解する為の一つの重要な鍵は、その作家の生い立ちや作品自身の中に含まれている象徴的な要素などの background を知ることである。特にコンラッドの作品を理解しようとする時、海や陸の役割を見逃してはならない。同様に、彼の性格が形成されていった過程で、彼の精神や想像力に最も影響を与えた多感な少年時代を探ってみることも重要である。それ故、この章では、海と陸という大きな世界をまずみしてみよう。そしてそれらが如何に彼の思想に結びついているかを考えてみたい。

コンラッドにとって、自然は人物と同じであり、それ自身性格を持っている。この物語の中で「非常に重要な役割を持った隠喩として、海と陸の道徳的な両極」⁽⁴⁾つまり善と悪を我々は見出す。コンラッドにとっての海は、不滅であり、神秘的であり、魅惑的であり、真の男たちには陸よりも価値がある。海がどんなに悲惨になろうとも、また冷酷になろうとも、「悲哀と恐怖の彼方に存在する平安の世界」(P.138)であり、そこでは「神が祝福する真の平和が訪れはじめる。」(P.31)これに反して陸——ジャングル、森、更には都市——は裏切りの象徴であり、悪の巣である。この作品の Chapter Ore の初めで、コンラッドはすでに陸を「不名誉と汚辱にみちた世界」と言い、それは「醜悪と飢餓、悲惨と消滅の中に横たわり、墮落を知らぬ清廉なる海をば四方から取りまいてる」(P.6)と述べている。そしてナーシサス号は「クライドの河のほとり、灰色の空のもと、黒煙の渦巻くところ、鉄板を打つハンマーが雷のようにとどろくなかから誕生した。」(P.50)更に彼女が帆をかかげてボンベイから出港する様子を

次のように述べている。

やがて帆脚索がぴんと引きしぼられ、帆桁が高くあげられて、船はするすると大きなピラミッドに変じ、陽の光がさしこんだ朝もやのなかを、白く輝きながらすべるように進んでいった。曳船はくると向きをかえると、陸地のほうへ引き返していった……そのかっこうたるや、あかるい陽の光にうろたえて、遠くの陸のうす暗い陰のなかに逃げ込もうとしてもかいている大きな油虫に似ていた。(P.27)

この航海の終りにテムズ河に入って来たナーシサス号は、再び雲の影に入り、その翳りは深まっていく。

魂のない壁の暗い影が彼女の上に落ち、世界中の塵埃がその甲板の上に躍った。そして見慣れぬ男たちが舷側をぞろぞろとよじのぼってきて、穢れたる陸の名において彼女を占領した。(P.165)

更に我々は海と陸が如何に効果的に他の象徴的な性質でもって、特に色彩の対照の使用でもって描かれているかを、はっきりと知ることができる。白と黒、光と影、太陽と雲、光明と暗闇——これらの対照は常に天候の相関変化によって伴われる。これはコンラッドの描写の特徴で、彼のほとんどの作品の中に見出される。この小説で、黒人ウェイトがこの船に加わった時「彼はぎらぎらと燃えるランプの光のなかに、頭を昂然ともたげていた。黒々とした闇とランプのあかるい光にくっきりと浮かびあがった頭」(P.18)と表現し、更に短い直喩の中にさえその対照を見ることができる。例えば「ある暗い考えが、ちょうどあかるい穏かな海の面を渡る雲の影のように、それまで晴れやかだった彼の顔の上をふっと横切った」(P.114)のように。あるいはまた黒人の死が近づいた夜「マストのはるか頭上では、白く光る天の河が、暗い地球の上にわたしたかけ橋のように、大空に悠然と光の孤状を描いていた。」(P.114)このように光と暗の image の相互作用が善と悪の運命感を伝える。終りに、海上での生活によってきずかれた連帯感に最後の一瞬まで固執している乗組員を、貪欲な陸の最も代表的なものである汚れた造幣局の建物の近くに立たせることによって、この物語は終わっている。

以上の点から、コンラッドの意識的な対照が証明される。特に光と暗の対照は、善と悪、海と陸、自然と人間を包含している。しかし何故コンラッドの文章が、暗い面を持っているのであろうか。何故彼はこのような道徳思想を持つようになったのであろうか。これらの答えの一つは、我々が彼の生い立ちを見る時、明確にされるのである。そこで彼の生い立ちを簡単に見てみよう。

ジョウゼフ・コンラッドは、本名をヨゼフ・テオドール・コンラッド・ナレンチ・コジエニオフスキーといい、1857年12月3日にポーランドのウクライナのベルディチエフで生まれた。当時ポーランドはロシアの支配下にあり、コンラッドが5才の時、彼の父アポロは捕えられて投獄され、それから北ロシアへ追放された。それはポーランド独立運動に加ったためであった。彼の両親は彼が12才になる前に死んだ。その後彼は叔父の家へあずけられ、叔父の親切なもてなしにもかかわらず、孤独になりがちとなった。当然読書に多くの時間を費すようにな

り、やがて読書やその他の影響で、心の中で理想化していた、船乗りになりたいという彼の望みが最後には強い目的となっていった。つまり青年コンラッドにとっては、陸のもの淋しい、不幸な、裏切りの、圧迫された<暗黒>に対して、海は<陽光>のように、夢にふくらみ、romanticで、自由で、希望に満ち、そして平和にあふれていた。彼は謀叛者の息子として、母国では十分な仕事につけなかったで、自由な世界を求め始めた。彼が17才の1873年頃色々な障害（その中には叔父の反対もあった⁽⁵⁾）に打ち勝って、彼は実際に船乗りとなった。そこで彼は、彼の長い海上生活を通して「勇気や忍耐や信義感や、船の仲間同士を一つにつないでいるあの暗黙のうちの忠誠心」（P.11）を知るようになった。このような境遇下で成長していったコンラッドの性格を見る時、確かに「もしコンラッドが、人種上の背景から彼に行わせた行為によって、孤独で淋しさを持った人間をひんぱんに描くなら、彼は自分自身の生活様式を投影しているためである⁽⁶⁾」という意見に同意することが出来る。

このようにみえてくると、コンラッドが2つの面から人間を眺めたのは、うなずけるところである。この物語で、彼は明確に、海と陸の代表的な人物を描いている。つまりシングルトンとドンキンである。シングルトンの堂々とした描写がまず目につく。

有能な船乗りで最年長の老シングルトンは、ひとりはなれてランプの下で本を読んでいた。ズボン一枚の腰から上は裸で、たくましい胸と筋肉隆々たる二の腕には、謝肉祭の音頭りのようにいれずみがしてあった……。あごには威厳のある白ひげをそなえた彼は、さながら未開人の学識豊かな族長といった感じであり、いわば、この世の冒瀆的な喧騒の中で泰然と落ち着き払った、野蛮なる叡智の化身のように思われた。

(P.6)

他方コンラッドは、ドンキンに集約された軽蔑を注いでいる。

こうした男にかぎって、舵も取れなければロープもつなぐこともできないし、暗い夜には仕事をさぼり、マストの上では気ちがいのように四つんばいでしがみつき、風やみぞれの暗闇にむかってわめきちらす男なのだ。ほかの者が働いている時に、ひとり海を呪ってばかりいる手合いとはこうした男のことなのだ。呼ばれれば人より一番おくれて顔を出し、真先きに舞いもどってくる奴がこれなのだ。たいていのことは出来ないくせにして、せめても出来ることになるとしたがらないという人種なのだ。いうなれば博愛主義者のお気に入りであり、利己主義にこりかたまつた山出し水夫なのである。自分の権利となると何から何まで心得ている感心な奴……。 (P P.10-11)

ロンドンに着いた後、その二人は互いに港湾事務所で会う。その描写は逆の対照である。

シングルトンが進み出た……。彼の両手は、大海原のまばゆい光のなかでは一度たりともためらいを見せたことはなかったのに、陸の深い暗がりのなかでは、小さな山に盛り上がった金貨を見つけることもよく出来なかった。「なんだ、書けないのか？」と事務員はびっくりして言った。「それじゃ印でいいからつけるんだな。」シングルトンは、苦心した末に、紙の上にはぼたりと太い十字の印を書いた。「なんていやらしい、おいぼれの獣だろう」と事務員はつぶやいた。誰かがシングルトンのために戸をあけてやった。家父長らし

い風貌をそなえたこの老水夫は、誰にたいしても一瞥すら与えずに、ふらふらした足どりで出て行った。

(P.P.168-169)

ドンキンが入って来た。彼は真剣な顔つきで息を切らし、仕事でひどく忙しそうな様子だった。机のところへむかってまっすぐに歩いて行ったかと思うと、事務員に威勢よく話しかけた。相手は内心ドンキンのことを聡明な人物だと思った。彼等は支払額についてしきりと話し合っていた。(P.169)

最後にコンラッドは次のように二人をまとめて述べている。

私はその後二度と彼等を見ることはなかった……。シングルトンは、さだめしあの忠実な長い船乗りの一生を海で終え、優しく平和な海の底でやすらかに眠っていることであろう。ドンキンは、まともな仕事とっては生涯にただの一度も果たすことはなかったろうが、生きる権利だの働く権利について例のいまわしい雄弁をふるうことによって、それなりに暮しを立てていったにちがいない。それもまた宜き哉！である。陸は陸、海は海——それでよいではないか！(P.172)

この章で私が示した深い情緒的・道徳的な力をもった、このような象徴的な文章を通して、我々は海はもちろん海上での生活が純粹で、陸の生活は汚ないというコンラッドの信念が分る。更に船上の人々は、海に出ると結ばれるが、港に入ると「人の結束を、ばらばらにしてしまう陸の力によって、ちりぢりにさせられた。」(P.167) つまり海は人間の結束、団結を強いる。一方陸は分裂をひきおこすのである。

この物語の背景をなす大きな世界、海と陸、更にはそれを代表する人物などの象徴的な役割を通して、コンラッドのひそかに主張している人間の連帯感や忠誠心を知ることができた。同時に彼は、善と悪にまつわる生と死の問題を我々に感じさせる。そこで次の章では、もう一つの世界、つまり生と死の世界を、順次物語を追ってみよう。

第Ⅱ章 生 と 死

『ナーシサス号の黒人』は、希望峰を経由してボンベイからロンドンへ帰る帆船の物語である。その航海中に多くの事件が起る。激しい嵐、黒人ジェイムズ・ウエイトの出現による乗組員の暴動、ウエイトの水葬、強烈な太陽のもとにおける凧等。そしてナーシサス号はついにロンドンに帰りつく。これは同じ名前の船でコンラッドによって実際になされた航海に基づいており、登場人物の大部分は実際のナーシサス号の乗組員であった。シングルトン(彼の本名はサリバンであった)、アーチィ、ベルファスト、それにドンキン。その上ジェイムズ・ウエイトのモデルについてもある記録が残っている⁽⁷⁾。しかし言うまでもなく『ナーシサス号の黒人』は単なる航海の記録ではなく、＜見るものであるばかりではなく聞くことの出来る＞コンラッドの想像力によって創り出された小説である。

V.ヤングは“Trial by Water”に於て、次のように書いている。

あらゆる神話においてそうであるように、行動の型はもちろんのこと、行動の原理までも、空間と時間を超越して反復されるので、『ナーシサス号の黒人』における社会的主題は、個人の魂の言及であり、そういう意味では、この小説は魂の冒険なのである……。この航海の事実に対するコンラッドの同胞への忠誠心は結局、彼の普遍的なテーマに付随するものであり、この小説を通して、それは象徴的な行動のうちに存在するそれと同等なものによって証明されている。⁽⁸⁾

別の角度からこの物語を眺めるならば、我々はそれを一種の誘惑と忍耐の allegory とみなすことも出来るし、あるいは試練の研究とみなすことも出来る。それはまた人生の allegory であり、我々の暗い人生航路の話でもある。そこで苦しみもがく人間にたとえられた生命をもった船、ナーシサス号が、如何にして航海をしていくかをみたい。そしてその航海を通して生と死の問題を考えてみよう。

この作品の Chapter Two の初めに、非常に重要な一行がある。——「ナーシサス号は出航した。」(P.27) このナーシサス (Narcissus) という語はそれ自体伝説をもっている。“The American College Dictionary” (1962)によると、「水に映った自分自身の姿に恋するようになった一人の美しい若者は、恋慕の情がつり、ついに水仙に姿が変わってしまった」(P.807) というのである。「ナーシサス号は出港した」という一行にあてはめると、この伝説は、作品の上に深い意味を与える。つまり陸の闇の中で生れたナーシサス号は、陸の特質である〈自己愛〉〈利己主義〉という要素を有している。更にナーシサス号は、元来ジャングルの生まれの黒人が、欺瞞的に吹聴している〈死〉をも持っている。そして海は確かに乗組員の集団的道德の姿を映し出す。——「海こそはすべてを知っている。広大な海は太古の昔から、その問題(生命の問題)をなかに、しっかりとかかえてきたのだ。いつか時がくれば、海は人間ひとりひとりにむかって、あらゆる誤謬のなかに隠された叡智を、疑惑の中にひそむ真実を……必ずや解き明かしてくれるにちがいない。」(P.138) 海という〈鏡〉は、あらゆる船上の虚偽をも映し出して試みる。これらの象徴はそれ自身生命をもっている。ここにコンラッドの思想がすでに示され、この航海がどんなものであるかを暗示する。このようにして「船は陸から切り離されたひとかけらにすぎず、一個の小さな遊星のごとくに、ただひとり刻々と進んで行った。」(P.26) そして「船にはそれ自身の未来というものがあつた。甲板を歩きまわる人間たちにおとらず、彼女もまた生命をもっていた。」(P.29) 更に microcosmic な船は次のように定義づけられる。

彼女を海の手引き渡した陸の世界と同様に、かずかずの悔恨と希望とを彼女もまた山と背負っていたのである。この船の世界でも真は弱気で小さく、嘘は大きくのさばっていた。陸の世界とおなじく、彼女もまたみずからを意識することなく、見たところきれいではあるが、人間どもの手によってけがされ、不名誉なる運命につながれてしまっていた。そもそも航海に出る動機からして人間の利欲から出た卑しいものだ。にもかかわらず、はるかなる旅路の気高き孤独が彼女にある種の威厳を与えているのだった。(P.P.29-30)

17人の乗組員と共に、ナーシサス号は、徐々に造り上げられる船首樓の連帯感による旅を続

ける。船は〈紳士〉について語り合う単純な心をもった水夫達を乗せて、平和そのものようであった。しかしながら彼らの心の中には、すでに無意識のうちに黒人ジェームス・ウエイトに対する恐怖が潜在していた。その黒人は船に到着した時から、巨大な image ではあるが、暗い神秘的な不可解な印象を、乗組員たちに与えていた。ウエイトが突然乗組員の前に現われると、彼らの「車座になっていた人々は散っていった。楽しい笑いは消えた……ことばひとつ発する者はいなかった……」(P.34) 彼の出現は沈みゆく太陽を速めるようにさえ思わせた。ボンベイを出帆して一週間後に、ウエイトは「おれのことはそっとして置いて貰いたいんだよ。先が長くねえのさ。おれはもうじき死ぬんだぜ……」(P.35) と断言した。乗組員たちはウエイトが本当に死にかかっているのかどうか、また仮病をつかっているのかどうかを明確に知りたかった。しかしその〈不明瞭さ〉が彼をして、彼らを恐怖に落とし入れ、船の人々をひそかに害し、墮落させた。彼らのお互いの信頼は揺れたが、しかし彼らはどうして良いか分らなかった。Chapter Two の終りで、コンラッドはその状況を次のように描いている。

やっぱり彼（ウエイト）はわれわれをふしぎな魅力のとりこにしていたわけで、われわれの心の中の疑惑は晴れることがなかったのである。彼は船全体に黒い影を投げかけていた。まもなく死ぬと言った約束に違わず彼の病勢がしだいにのってゆく様子に、まさかと多寡をくくっていたわれわれの自尊心はひどく傷つけられた。われわれが勇氣ある心を欠いていることを、彼は日一日と暴露してみせたのである。彼はわれわれの生活をむしばんでいった。」(P P.46-47)

つまり黒人ウエイトは乗組員に恐怖、疑惑、沈黙、分裂、“death-force”⁽⁹⁾ をもたらし始めた。これらは乗組員が遭遇した試練であった。しかし老シングルトンやアリスタン船長、それに暴動の誘引者ドンキンに影響を受けなかった。というのはシングルトンと船長は「懷疑も希望も抱かぬ人間が強いように」(P.25) 変ることなく強かった。そして乗組員たちによって軽蔑され、ののしられ、侮辱されたドンキンは、彼らの trouble によって乱されたというより、むしろ喜んだ。そして trouble を広げる為にウエイトと親しくなった。

一方ナーシサス号は内部から悩まされ始めたばかりでなく、外部つまりもう一つ別の大きな試練である嵐によって悩まされ始めた。ボンベイを出帆してから32日目に、船にひそんでいる悪魔を神が罰するかのようにつけてきた。そして「目に見えぬ風の暴成と戦いながら、なんとかして道を切りひらこうと、船はあちらへまたこちらへと針路を変えていった……まるで苦痛にもだえるかのように、休む間もなく左右に揺れつづけた。」(P.49) やがて嵐の真只中にナーシサス号は突入し、ほとんど難破せんばかりであったが、しかしなまけ者のウエイトと邪悪なドンキン以外の全乗組員が一団となって、激しい波や、獰猛な風や、狂う雨と戦った。船長の冷静な命令、シングルトンの落ち着いた行動は、船を救い前進させた真の“life-force”であった。嵐の間中ずっとジェームス・ウエイトは全く乗組員に忘れられていたが、嵐がやわらぐとすぐ、その翳りのある image が乗組員たちの心に再び入って来た。乗組員に考える時があればあるだけ、ウエイトの威嚇が大きくなり、彼に対する憎悪の念が大きくふくらんだ。しか

し多くの困難に打ち勝って、やっと乗組員は、嵐によって甲板室に閉じこめられた憎むべき黒人を救い出した。この嵐は乗組員に試練を与え、絶望的な危機の中で一つに団結した乗組員の連帯感、勇気、忍耐をもたらした。ここにコンラッドの善と悪に関する確固とした信念と、我々人間の協力の必要性を見出すことが出来る。またコンラッドは、人間ではなく、自然あるいは神が、社会が存続するために頼っている真の人間の連帯感、誠実さ、忠誠心など、理想とすべき団結に対する試練を、人間に与えるということも考えたに違いない。そしてそれは疑いを通してではなく、この連帯感が達成されるという確信を通してである。コンラッドは海上での彼の経験を通して生まれたこのような信念のもとに、アリストン船長や老シングルトンを描いている。彼は次のように言っている。

果てしなく仕事に追われ瞑想の時を与えられないことこそ、むしろ永遠の慈悲のなせるわざと言ってよい……。陸の賢者どものうるさいわめき声にけがされた退屈な長い日夜の償いは、苦痛と労苦をじっとかかえた大いなる沈黙と、めだため、ひそやかな、忍耐強い人々（海の男たち）の無言の畏怖と無言の勇気とによってはじめて果たされるのである。（P.90）

やがて嵐が去り、ナーシサス号は希望峰をまわり、船の航海方角もまた南行から北行に変わった。更に船は希望峰の東側から西側へと進んで行った。

かくてわれわれは太陽のたのしげに輝く貿易風帯にはいった……。あの時から、われわれの生活はあらたにはじまったかのように思えた。あの時われわれはいったん死に、そのあと生まれ変わったのだと言ってもよいかもしれない。希望峰の向う側の印度洋におけるかすかすの事件は、航海のいわば第一部、すなわちあたかも前の世にあった出来事のおぼろな記憶にすぎないかのように、すべて霧につつまれ、消え失せていった……。°そしていまふたたびわれわれは生き返ったのである。（P P.96.-100）

地理学的気象学的に於てさえ、コンラッドの善と悪の二元性を感じざるを得ない。そしてそれは人間の行動の危機と関連しているのである。作者はナーシサス号を新しい生命をもったもの、つまり生まれ変わった生物と考えている。

救助された黒人が、アリストン船長に仕事に帰れる準備があると言った時、その船は次の試練に入っていた。というのは、その黒人は確かに死ぬと信じていた船長が、それを拒絶したのである。しかしながらジミー（ジェイムズ・ウエイトの愛称）を理解していなかった乗組員の間に、船長の黒人の扱い方に対して不満や憤慨が起った。その結果ドンキンが活躍を始めたのである。彼の役割は常にジミーが乗組員に植えつけた悪の種を目覚めさすことであつた。狡猾なドンキンはついに乗組員に暴動を起させんばかりのところまでもたらしたが、その時船の――

突然眠っていた帆が目を覚まし、非常な勢いでいっせいにばたばたとマストにぶちあたった……。船はぶると震えた……。あたかもそれは見えざる巨大な手が、甲板にむらがる人間たちにむかって、事実を目覚めよ、注意を怠るな、義務はどうしたと言わんばかりに、怒って船をゆすぶったかのようにだった。「上げ舵だ！」船長がするどくどなった……。ぎくっとなった水夫たちは、命令を口々にどなりつつ素早く走って

行った。(P.P.124-125)

ふくれ上った暴動は巧みにコンラッドの技術によってこわされた。ジミーとドンキンは乗組員の egoism, 怠惰, 無秩序をひき起したが, しかし連帯感を分裂させるまでにはいかなかった。ジミーは確かに乗組員に, 彼がある神秘的な魅力を持っているかどうか, 不思議に思わせるような<死の力>を持っていた。しかしそれは<生の力>の出現によって負かされた。これはコンラッドの哲学を示している。

「重苦しい静けさが, 船全体に満ちていた。」(P.138) これは最後の Chapter の始まりである。ナーシサス号はまるで乗組員の暗い感情もしくは悪い前兆を反映しているかのようである。黒人ウエイトは日々にはっきりと弱まっていった。乗組員は彼に同情し始め, 彼を航海の終り, つまりロンドンまで生きながらえさせてやりたいと思った。「ジミーの(生きたいという)欲望はわれわれによって勇気づけられ, ワミボウによって助けられた。ワミボウが呪文をかけているから, この船は進まなくなっているのだ。」(P.142) 更に老シングルトンは「この逆風の原因はジミーなのだ。頻死の病人は陸地の姿が見えるまでぐずぐずと生きていて, 陸地がいざ見るとそこで死ぬ」(P.42) と非難した。ついにナーシサス号は凧に入り, 完全に止ってしまった。ここで暑い夜に際立って冷たい氷った霧の image を与えることによって, 錯覚を生じるような船や超自然的な夜を感じさせる。次の引用の前半は自然の清澄を示している。一方後半は人間の暗さを示す。それはすでに述べたようにコンラッドの表現の特徴の一つでもある。

よく晴れた夜など, 死せる月のひややかな光のもとにしずまりかえった船は, すくなくともうわべは, 地上の冬にも似た無心の平静さを示していた……。足音が, 静かな甲板にこだました。月の光は, 霧がそのまま凍ったかのように船にまといつき, 白い帆は一点の汚れもない雪のごとく, まばゆいばかりの円錐形を浮かびあがらせていた。幽玄にして壮麗な月光のもと, 船はさながら理想美の幻影のごとく清らかに, また平和に満ちた夢のごとくなごやかに見えた。この世の現実と思わせるものは何一つなく, すべてぼうっとかすんでいるように感じられた。幻影の世界からわれに帰らせるものといえば, ただ一つ甲板を音もさせずひっきりなしに動きまわる黒々とした人影ばかりだった。夜そのものよりもなお黒く, 人の胸の中の思いにも劣らぬほどたえまなしに動きまわる人影……。

ドンキンもこの人影のなかの一人だったが, 彼はほかの者とはいっしょにならず, ただ独りきりで怒ったように歩きまわっていた。ジミーの奴死ぬのになにをぐずぐずしているんだ, と彼は思っていた。その日の夕方まだ暗くならぬ頃, 陸地が見えたとの知らせがマストの上の見張りからあった。(P.145)

何よりもまずこの Paragraph は「コンラッドの<リアリズム>は, 思想という熱烈な手の中の水銀のように, しっかり握ろうとすれば, 指間からこぼれ落ちそうになる⁽¹⁰⁾」という一文を私に思い出させる。コンラッドの詩的能力は更に我々を神秘の世界に引き入れ, そして彼がしばしば呼ばれるところの“authoritative moralist”あるいは“romantic realist”としての真の価値を示してくれる。しかしとりわけこの引用文の最後の行に於ける, 死を暗示している

コンラッドの想像力は、至高の力を持っている。そして更に S.T. コウリッジの『老水夫行』の「風なく、動かず、我等とどまる。／絵にある船が絵にある海に／為すなく立つにきながら似たり。」⁽¹¹⁾ という3行を思い出させる。その船は老水夫の罪のために凧の中にとじ込められるのである。この凧は平和や安らぎの時としてではなく、罪に根ざした生命も進歩もない死の時期なのである。コンラッドはその凧を、同じ作法で、ナーシサス号の罪の問題を指摘するのに用いている。

シングルトンが予言したように、ジミーは、陸を一瞥した後死ぬ。甲板室でランプは明かるく輝いていたけれども、彼の暗くなっている眼はそれを見ることができず、彼は息をひきとる時「あかり……ランプ……ああ……消えちまう……」(P.154) とつぶやくのである。乗組員の反応はふくれあがった驚嘆というべきものであった。

これまでジミーがこしらえあげた嘘をどれほど深く信じ込んでしまっていたかがはじめてわかってきたのだった。われわれはそれまでジミーの生命力を彼の言葉どおりに信じ込んでいたものだから、いざ死んでしまってみると、ちょうど古い信仰の死と同じく、そのためにわれわれの社会の基盤そのものが、がたがたに揺すぶられるのを感じた。ジミーの死と共に、われわれの間では共通の絆というものが消え失せてしまったのである。感傷的な欺瞞ゆえに生じた、強靱な、有効な、お上品な共通の絆が……。 (P.155)

ウエイトと乗組員の関係の一部は彼と共に消えたが、「疑惑の念だけは、ジミーが死んでも生き残っていた。」(P.155) まもなくウエイトの水葬が始まる。みんな死者のまわりに集って、彼らの帽子を取る。ベイカー氏が祈祷書を読み続ける。ここには、ある情緒的なもの、悲しいが強い何か、海でのきびしい経験を通して結ばれた船員間にある同胞愛の絆、といったようなものがある。ウエイトの死体は、ベルファストが「ジミー、男らしく行くんだ!」「行くんだ!」(P.160) と叫ぶまで、板の上をすべり落ちようとしなかった。そして「不当な積荷をおろして解放されたかのように、船はぐらりと横に揺れ、帆はぱたぱたとはためいた。」(P.160) ここで作者は何を強調しているのであろうか。その答えは延期の象徴である。その黒人の名前ウエイト“Wait”はジミーが遅れて船に乗込んで来た時、名前としてよりむしろ命令として受け取られた。そしてここでは他のスペリング“weight”つまり<重荷>という力を持っている。⁽¹²⁾ 更にコンラッドの象徴的な面——嵐……蘇生……水葬……救い——に集中してみると、聖書のヨナ書の物語を暗示する、罪に関する生と死の構図を見ることが出来る。⁽¹³⁾ 船が凧に入った時の場面やこの場面などを考え合せると、コンラッドの文章が二重にも三重にも意味を持っていることを知るのである。ジミーの水葬が終るや否や風が吹き始め、一週間後にナーシサス号はついにロンドンに到着した。「ナーシサス号はかくていま生きることを止めたのであった。」(P.165)

このようにコンラッドは、ナーシサス号の誕生から、生命を得て死に至るまでを示している。そしてこの啓示を通して、我々はコンラッドの人生観、道徳観、芸術観を知ることが出来た。ナーシサス号は宇宙という場の microcosm であり、更にその上にコンラッドが立って、

人間の試練として、その闘争を見ている。コンラッドにとって、生命は神秘であり、思想がむなしく、空虚で、翳りで満ちているような人間を常に試すのである。しかし生命はまたそのような試練を通して人々を支える何かを与える。コンラッドによれば、この何かは確信と連帯感で、それは“life-force”から成り立っているのである。次の章に於て、人間の心理学的観点から更にこれらの問題を探ってみよう。

第Ⅲ章 無私と我欲

コンラッドは晩年、H.S. キャンピイ氏への手紙の中で、『ナーシサス号の黒人』に於ける真の主題について、次のように主張している。

『黒人』において私は、一群の人間たちの心理を示し、自然の或る面を描きました。しかし、人間たちの直面する問題は、海の問題ではなく、ただ、船の上で起った問題だというに過ぎません。船の上では、陸上のあらゆる紛糾から切り離されているため、問題が特殊の力と色彩を帯びてくっきりと浮び上がるのです。⁽¹⁴⁾

上の手紙から知ることが出来るように、コンラッドは人間の内なる世界——三つめの世界——にひそんでいる問題、つまり人間の本性、良心、復讐、固執の問題を描きたかったに違いない。言い換えれば、彼の真の主題は、極限状態の世界での個人あるいは集団の心理学的研究である。それ故この章では、ナーシサス号の航海とは離れて、もう一つの目に見えない世界である人間の相互関係、特に黒人ウエイトと他の乗組員との関係を述べてみよう。これは連帯感の問題と深く結びついているのである。

これらの関係を見る方法の一つは、ジェイムズ・ウエイトに対する乗組員の集団的關係を観察することである。困窮状態における人間が、他人に及ぼす<倫理的要求>の象徴として、その黒人を見なすことは出来ないだろうか。この倫理的要求を通して、ウエイトは乗組員の連帯感を裂き、混乱を作り出すのである。更に個人的な反応を見ることの出来るもう一つの研究方法は、ジェイムズ・ウエイトを一種の万華鏡 (Kaleidoscope)⁽¹⁵⁾ もしくは<意識の鏡>としてみなすことである。というのは彼は病気で寝床に横たわっている時、彼のところへ他の連中がどのような感情や考えを持って来るかを、そして他人が彼に彼ら自身の感情の明確な image をもたらすかを、映し出すからである。

まず最初にジェイムズ・ウエイトによってなされた倫理的要求の観点から、これらの人間関係を眺めてみよう。ジミーが乗組員と関係を持ち始めたのは「あたしはこの船の乗組員でさあ——」(P.18)と言った時からである。「黒人の眼はぎょろりと白眼に変わった……。二度咳をした。その咳たるや、金属的な、うつろな、おそろしく大きな音で、さながら空洞の中で二回爆発がおこったかのごとくだった。」(P.18)ジミーの死後でさえ生き続けた乗組員の疑いや恐怖は、すでにここではっきりとうちたてられた。

彼（ウエイト）は、人間の愚かさをたえず牛耳りあやつる秘訣を心得ていた。このいまましい死にかかった男は、人生の秘密を知っていたのだ。そして彼は、われわれの生活の一瞬一瞬をすっかり支配していたのだった。（P.37）

その結果、彼は、anarchist であるドンキンの活動と乗組員の間にある不満の証明としての危険な前兆である盗み——バルファストが日曜日のフルーツパイを盗んだ——を船上にもたらした。同時にその黒人もまた自分自身をだましていた。そのため彼は、自分の務めをしないでも良いようにしてくれる乗組員の善意を利用している、仮病患者であると考えることによって自分をあざむいていた。彼はついには自己欺瞞に絶望的となった。しかしながら乗組員の間にはひそんでいる疑いは消えなかった。

われわれはジミー・ウエイトを憎んでいた。どうしても疑ってみずにはいられなかったのである——この黒ん坊め、病気のふりをしてきたのではないか、こっちの苦労や軽蔑や忍耐を目の前に見ながら、ふてぶてしく仮病を使ってきたのではないか、と。そして今も、われわれの積極的献身ぶりを見ながら、いや死を眼前にしなが、なおも仮病を使っているのではないだろうか、と。われわれの心の中にある漠然とした（決して完全なものとはいえない）正義感が、ジミーの男らしくない虚偽にひどく反発を感じていたのである……。いや、そもそもが嘘なんぞではなかったのかもしれない。彼だって苦しみのどん底にあったのだ……。憤りと疑惑とがわれわれの中で取っ組み合いをし、高尚なる感情はことごとく踏みにじられてしまっていたのではないか。われわれは、自分等が疑惑を抱いているがゆえに彼を憎んだ。あやしいと疑ったがゆえに、彼を嫌ったのだ。（P P.72-73）

嵐が船に襲いかかった時、我々は甲板室で死を恐れた真のウエイトの姿を見た。彼に対する疑いや憎悪を忘れて乗組員は、団結し、疑いもなく彼を助けようとして危険をおかした。ここにコンラッドは生の力を示している。つまり無私と連帯感である。意識（ウエイトに対する憎しみ）と無意識（助けようという理性もしくは良心）の間の、この乗組員の感情あるいは状態は、フロイトのいう、ウエイトを“id”に変える“super-ego”（超自我）もしくは無私の型のものである。⁽¹⁶⁾しかし嵐の後、誘引者ドンキンは乗組員が没入した自己満足感を利用して、危機によって団結した乗組員を再び彼らのバラバラの生活の egoism に引きもどし、そして再びウエイトに対する彼らの利己的な奉仕（忠誠）の試練を強制した。コンラッドはウエイトの威示影響を次のようにまとめている。

虚偽が勝利を得たのだった。それは、われわれの疑惑や、愚味や、憐愍や、感傷につけこんで勝利を得たのである……。他人の苦しみに対する同情の底には、実はひそかに利己主義が隠れていて、それが、ジミーの死ぬのを見たくないという不安な心理へと高まっていったのだった……。彼は徐々に人の心をくじき、迷いを与えていった。彼のせいで、われわれは非常に優しく人情味を持つようになったが、同時にまた複雑にそして非常に頹廢的になっていった。われわれは、彼の恐怖が決して単純なものではないことを理解し、ジミーがたえず見せる反発や畏縮や逃避や迷妄すべてに同情を持った。そしてその反面、われわれの方がいわゆる文明人になりすぎて素朴さを失い、腐りはて、人生の意味を見失ってしまっているのだという意識を抱

きかねなかったのである。(P.P.138-139)

ここで感傷的な憐愍の情は、egoism の形である、という作者の信念を知ることが出来る。乗組員はウエイトの仮病に同情した。そして確かに道徳的試練の象徴として、その感情に訴えることによって「彼(ウエイト)は、われわれの世界の道徳的色合いというものをしだいに変えていった。」(P.139)しかし乗組員全員が彼から害を受けたというのではない。アリストン船長やシングルトンはもちろんのこと、福音伝導者然としたポドモアは、ウエイトの道徳的意味を理解し、黒人の仮面の後に satan の顔を見つけていた。別の方法でドンキンもまた影響されなかった。ちょうどこの悪の表示を喜んだように。

次に乗組員のそれぞれについて、各々の<万華鏡>を通して見てみよう。チャーリーが皮肉的に「要するに、やつは人間で、そして水夫だってことよ」(P.11)と紹介したロンドン育ちのドンキンは、永遠の不平家である——最初キーキーと言ひ、そして不言をならし、それからのしるのである。更に「彼(ドンキン)は、いわばこの連中の単純素朴な本能に訴えるすべをちゃんと心得ていた。」(P.12)ドンキンはジミーの病氣、つまり結核を見ようとしなかった。彼は自分自身を反映している欺瞞で、怠惰で、高慢で、無力な面を見た。

「きさま常連だな、監獄の」ジミーは弱々しく言った。

「そうさ……おれはそいつを誇りに思ってもいるんだぜ。おまえにはそういった根性がねえ。だからこみな油を売ること考え出しゃがったのさ……」ドンキンはいったんことばを切り、しばらく考えこんでからおもむろに念を押すように言った——「おまえ、ほんとうは病氣じゃないんだろ、どうだ？」

「ちがうさ」ジミーはきっぱり否定した。だがそのあと急に声を落として、つぶやくように言った——「今年はちょくちょくおかしくなることがあるんだがね」……するとジミーははげしく咳をし、やっと息がつけるようになるとただちに弁解して言った——「なーに、わるかないのさ」

ドンキンはふふんと嘲るように肩をすくめた。(P.111)

ドンキンは、ジミーの中に結核のような咳や弱々しい身体を見たのではなく、彼自身の利己的な狡猾さを見た。しかしドンキンは道徳的あるいは扇動的な力に於ては、ジミーよりも劣っていた。彼はジミーのお金を盗んだのである。ジミーなしにドンキンは乗組員を悪に引き込むことは出来なかったであろう。ドンキンが乗組員の心に恐怖を与え、ウエイトはそれを彼らの心の奥まで投げつけた。ドンキンは<エゴイズム>の代表である。

嵐の時に乗組員にコーヒーをつくったあの料理係のポドモアは、宗教的な狂信家であり、福音伝道者であり、キリスト教の罪をもった人たちの船上で、唯一の救われた人物であった。彼もまたジミーの中に自分自身を見た。

この黒ん坊の靈魂に対する心づかいが、わが身は永遠の生命を与えられているという誇り、そして自分には力があるという自覚が、彼(ポドモア)の胸の中に満ちてきた。目の前のこの男(ジミー)を両腕に引っかかえて、神の救いの真只中に放り込んでやるか……。その黒い魂を……魂以上に黒い肉体を……腐った悪

魔を……。『罪で息もつまるほどなのに……。ジミーを救え、とのお召しの声がわしにはきこえてくる。夜も昼もだぞ。ジミー、わしが救ってやるからすべてわしにまかせるのだ……。さあわしといっしょに祈るんだ……。』(P.P.115-116)

黒人の魂は悪魔によってとりつかれているというポドモアの信念は、ジミーを恐しい陰謀者としてではなく、＜宗教的な罪人＞として彼の万華鏡に見出した。そして彼の死の床でジミーの魂を変えさせようとしたのである。

冷静な合理性と鋭い道德感をもったアリスタン船長は、彼の内なる眼に、義務に基づいた命令のみを見た。船の善きものに対して、義務の履行に対して、誠実な奉仕をもっていた船長にとって、ジェームズ・ウエイトは、乗組員の士気に対する恐怖ほど個人的には恐怖を与えなかった。船長は船長として、彼の地位を再び断言するために、また暴動にひんする乗組員に命令権を取りもどすために、ただ彼の指導権を行使しなければならない。

「おまえのは仮病だ」船長はきびしく言い返した。「そうだと」彼は一瞬ためらっていたが、すぐにあとを続けた。「そうさ、誰にだってわかっている。おまえはなんともなかったんだ。それなのに自分勝手の都合から寝てばかりいた。さあ、これからはわしの都合で寝てもらおう。ベーカー君、いいか、これはわしの命令だ、この男(ジミー)を航海が終わるまで甲板に出してはならんぞ」(P.120)

そして船長は乗組員が危険に直面すると「各部署に着け！」という言葉によって乗組員みんなを救った。彼の万華鏡はつねに義務に焦点が合わされていた。船を離れる時、ベーカー氏に告げた最後の命令は「明日の朝、経線儀のねじを捲くのを忘れないように頼んだぞ」(P.165)であった。アリスタン船長は＜無私＞の代表者である。⁽¹⁷⁾

アイルランド人のベルファストは、ジミーのためにパイを盗んだ男であり、彼を甲板室から助け出し、船から離れるようにとジミーの死体に説得した男であった。彼は奉仕の精神でジミーを見た。

彼(ベルファスト)は暇さえあれば、ジミーの部室にはいつかいた。ジミーの世話をし、彼に話しかけてやっていた。女性のようにやさしく、年とった慈善家のように晴れやかにそして模範的な奴隷所有者のように情をこめて黒人に接してやったのである。(P.140)

ベルファストはまた陸に着いた時、乗組員の一人であったこの物語の語り手に話しかけた。

「おまえもあいつの仲よしだったなあ……。でもおまえは、あいつをひっぱり出してやったんだ……。なあ、そうだろう？ 髪の毛の短いやつだった……。そうさ。それからあのいまましいパイを盗んでやったのもこのおれさ……。あいつは海へおりたがらなかった……。誰が何といたって、あいつは海へおりようとしなかった……。」ベルファストはどっと泣き出した。「おれが落としたんじゃねえよ、おれはあいつにさわりもしなかったんだ。ほんとだよ。絶対だ！」彼はすすり泣きながらしゃべっていた。「でもあいつは、おれが頼んだらすべり落ちてくれた……。こ、こ、子羊みたいにおとなしく、だぜ」(P.171)

ベルファストのジミー観は、＜感傷的な愛＞の色を通してであった。

老シングルトンは彼の経験から養われた直感力に富む知識を持っていた。ちょうどシングルトン (singleton) という言葉が、トランプの一組のうち一枚の淋しいカードを暗示するように、そのようにその男の名前シングルトンは、ここでは連中の中で一人ぼっちで独立心のあつた男を代表している。そして更に船乗りの特徴である気易さを示している。つまり “single tone” である。彼は「およそ感情とは無縁な生き方をしていた。」(P.41) だから彼の万華鏡はまた異常なまではっきりしていた。「あの男 (ジミー) はどうしようもないのだ。どうやってもあの男は死ぬ」(P.130) と言っているように、彼はジミーを＜一人の人間＞として見た。シングルトンは彼自身の mortality も認めた。——「不吉な真実」(P.100) つまり「ああ齢だ！……眠っている間に計略にはまって縛りあげられた人間のように、シングルトンは目を覚ましたとき、これまでは何とも思わずにすごしてきた長い年月の鎖によって自分が手枷足枷をはめられているのを発見したのだった。」(P.99)

以上私は心理学的にジェイムズ・ウエイトと乗組員との間の関係を、二つの視点に立って見てきた。各自の万華鏡を通して乗組員たちが実際にジミーの中に見たものは何であったろうか。彼らが見たものはジミーではなく、結局は自分自身、つまり ego であると作者は言っている。これらのバラバラの ego は、困難の中にある各乗組員に、乗組員になされた倫理的要求によって訴えられた。各乗組員の ego にふれたこの要求のため、黒人は乗組員の連帯感におびえた。この仮病という ego、それは各人の心にひそんでいる個人的な悪魔であるが、どんな人々の集団のきずなでも切断し、墮落、愚かさ、誘惑、分裂、そして混乱を引き起すのである。それはつまり死の力である。コンラッドは、我々に、人間の真の連帯感は、どんな社会にも必要であり、そして無私の試練に耐え働いている間に造り上げられるということを、示しているのだと思う。

結 び

この物語について、コンラッドの芸術、道徳の或る面を、三つの世界を通して見て来て、彼の芸術は意識的で深い、しかし彼の教訓は無意識的であるということをはっきりと知る。彼の海洋小説を読む時、我々は我々が困難に耐え、厳しい自然と戦わなければならない人生の image を、彼の入念な描写によって知らされる。そしてこの image を通して、コンラッドが我々にひそかに示している人生の教訓を学ぶのである。更に彼のもとからもっている豊かな想像力、彼の経験から得た深い洞察力、海への愛によって創造せられた自然に流露する Poetic emotion を、我々は感ずるのである。

私は特にこの物語に於ける人間の連帯感を主題にしたものを述べてきた。第1章において、私は背景に重点をおいて、＜海と陸＞の大きな世界を観察した。そこで善と悪の象徴、シングルトンとドンキンの対照、そしてコンラッド自身の少年時代を示した。第2章では、広大な海

の中の小さな船、ナーシサス号に視点を向けて、航海中の〈生と死〉の問題を通して人間の連帯感を見た。二番目の世界である。最後の章で、更に小さい目に見えない世界——乗組員の心——を探ってみることによって、私は心理学的な分析を試みた。つまり人間の連帯感の問題となる黒人ジェイムズ・ウエイトを取り囲むグループを通して、〈無私と我欲〉を研究した。

そして今私は一つの確信を得た。コンラッドははっきりと、この作品の中の最後の Chapter で次のように我々に話しかけている。「そもそもわれわれは、不死不滅の海に暮しをともにして、われらの罪深い生活の中かなんらかの意義を学び知ったのではなからうか？」(P.173) その意味はまさに私のその確信である。それはこの世に於ける人間の連帯感の力強さと、その必要性である。人の不幸は人間自身から起こる。人間の欲望からねたみ、trouble、暴動、闘争、悲劇が起こる。しかし真の船乗りは争ったり、trouble を起こしたり、お互いにねたんだりする時間がない。彼らは海の激しさに対して互いにきずなを結び、互いに助け合い、忠誠をもって義務を果す。海の男の生活は真の生活の秘訣を示している。“A Familiar Preface” の中でコンラッドは次のように書いている。

私の作品を読む人々は、次のような私の確信に気づかれるだろう。すなわち、この世は、二、三のごく単純な考えに支えられているものだということであって、それはあまりに単純なので山々と同じ位古いにちがいないと思われる。この世は、中でもとりわけ信義 (Fidelity) という考えに支えられているものである。⁽¹⁸⁾

彼の確信、つまり彼の人生哲学は、信念、忠誠、誠実、義務、連帯感の考えに基づいている。これらは、私が述べてきた三つの世界の根底にあり、その支柱となっているものである。コンラッドはまた次のようにも書いている。“Art is long and life is short, and success is very far off.” (P.xi) 確かに外国人であるコンラッドにとって、芸術家もしくは小説家になることは、偉大な忍耐と努力を必要とした。そして彼の生活はあまり幸福ではなく、彼の成功は容易ではなかった。しかし我々はこの物語の中にいくらかの欠点、例えば話し手の問題⁽¹⁹⁾などを認めるけれども、我々は彼が『ナーシサス号の黒人』で著名な成功を成しとげたことを認める。というのは、Preface の中で彼が言っているように、彼は見事に我々の人生にとって有用な多くのことを〈感じさせ見させて〉くれたからである。コンラッドの死後まもなくして書いた H・L・メンケンの言葉は当を得ているので、最後に引用しておこう。「多分彼より偉大な小説家はあったであろうが、しかし、コンラッドはかつて小説を書いた人の中では無比の、最高に偉大な芸術家であると私は信じている。⁽²⁰⁾」

注

- (1) “To My Readers in America” (Preface of 1914), *The Nigger of the “Narcissus”*.
- (2) G. Jean-Aubry, *Joseph Conrad, Life and Letters* (London, 1927), Vol. II, P. 342.
- (3) 宮崎幸一著「コンラッドの小説」垂水書房(1964), P.10.

- (4) Vernon Young, "Trial by Water," *The Art of Joseph Conrad, A Critical Symposium*, R. W. Stallman (ed.), Michigan State Univ. Press (Michigan, 1960), P. 109.
- (5) 注(3)に同じ P.226. しかしながら, 後には, 叔父はロシアの徴兵をさけるために, 船員として英国に帰化することを, コンラッドに進めている。
- (6) Welsey Carroll, "The Novelist As Artist," *Modern Fiction Studies*, Kraus Reprint Corporation (New York, 1955), P. 7.
- (7) John D. Gordan, "The Four Sources," *The Art of Joseph Conrad, A Critical Symposium*, P. 75.
- (8) *Ibid.*, P. 109.
- (9) Robert F. Haugh, *Joseph Conrad : Discovery in Design*, Norman(Okla., 1957). This is a study of the allusions to Jimmy Wait as a "death-force" and to Singleton as the "life-force" of the "Narcissus" on both the allegorical and metaphysical levels.
- (10) R. L. Megroz, *Joseph Conrad's Mind and Method, A Study of Personality in Art*, Russel & Russel (New York, 1964), P. 227.
- (11) Ernest Hartley Coleridge, *The Poems of Samuel Taylor Coleridge*, Oxford Univ. Press (London, 1957), pp. 190-191.
- (12) *Young, op. cit.*, p. 114.
- (13) *Jonah* 1 : 4-6, 11-12, 15.
- (14) *Jean-Aubry, op. cit.*, P. 342.
- (15) Arthur F. Kinney, "Jimmy Wait: Joseph Conrad's Kaleidoscope," *College English*, Vol. 26, No. 6 (March, 1965), 275. "A Kaleidoscope is a toy which by itself is useless; it is neither automatic nor self-locomotive. It must be held up to the light and turned until the chips of colored glass within it form a pattern appealing to the pleasure and reason of the viewer. The number and colors of the bits of glass are constant, but the patterns change as the viewer acts upon them and their vividness changes as the viewer holds the kaleidoscope more or less directly towards a source of light."
- (16) Albert J. Guerard, "The Nigger of the Narcissus," *Conrad the Novelist*, Harvard Univ. Press (Cambridge, 1962), P. 113.
- (17) *Young, op. cit.*, P. 116. "On the analogy of the psychic organism, Allistoun is the *super-ego*, dominating consciously the subterranean murmurs of defeat. His insistence that Wait remain in his cabin is a further act of will over the emerging death-wish; her refuses it the light of day."
- (18) *A Personal Record*, J. M. Dent & Sons Ltd. (London, 1960), P. xix.
- (19) 注(3)に同じ P P.27-28. この物語の語り手は, 名前も実体もない存在であるが, 最初は「われわれ」という複数形を用い, 最後には「私」という単数形になる。全知の作者でもあり, 乗組員の一人でもある点, 曖昧である。
- (20) *Carroll, op. cit.*, P. 8.

・テキストは *The Nigger of the "Narcissus"* (J. M. Dent & Sons Ltd., 1964) 版を使用。なお本文

の訳は高見幸郎訳「ナーシサス号の黒人」（世界文学大系86コンラッド）筑摩書房（1967）を用いた。